

《モスクワ・アラカルト78》

## 「MOCT (モスト)」(集英社)に寄せて

日向寺 康雄

11月17日、新橋の帝国ホテルであった第21回開高健ノンフィクション賞の贈賞式に招かれた。今回の受賞作は青島頭(毎日新聞記者)著「MOCT『ソ連』」を伝えたモスクワ放送の日本人」で、私もできる限り取材に協力し、また私自身についても掘り下げてかなり書いて頂いた。「日口交流」紙からの引用も多い。プーチン政権によるウクライナへの「特別軍事作戦」が続く「嫌口」ムードの中、よく受賞できたものだ。有力候補作には、ウクライナをテーマとしたものもあったと聞く。日本では「プロパガンダ放送」と切り捨てられてきた私達の仕事について、人間的で中立的かつ客観的な視点から、細かな取材によるエピソードを丹念に積み上げ「そこで生きた人間」の存在をリアルに浮かび上がらせてゆく青島記者の昭和流職人芸に脱帽する。

金屏風で飾られた舞台での華やかなセレモニーを見ながら、私は2つの出来事を鮮明に思い出していた。一つは、もう30年近く前になるが、モスクワの日本大使館でのパーティーに出席した折、ある館員から「あなたは、モスクワ放送で働いて恥ずかしくないのか?」と言われたこと。もう一つはソ連崩壊直後、特別番組の収録中、私が「これまでモスクワ放送の目的は共産主義のプロパガンダでした」と言った時、それをスタジオで聴いていたレヴィン課長がすかさず録音を止め「『目的の一つは』に言い換えて下さい」と強く求めた事だ。

私達は、ソ連人も日本人も皆「自分達の仕事が両国の架け橋になれば」と本気で願っていた。素晴らしいリスナーにも恵まれた、中学生の頃から60年以上、インターネット放送「スポーツニク」に至るまで見捨てず定期的に必ず受信報告と感想を下さり応援し続けてくれた群馬県高崎の「リスナーの神様」鈴木義一さん、私達がピンチに陥った時、いつも有益なアドバイスを下さった「国際短波放送情報」の細谷正夫さん…お名前をあげたらきりが無い。交流協会においては、故坂本斐子常任理事に大変お世話になった。東京支局が閉鎖された時、協会がリスナーからの手紙の日本国内受け取り窓口を代行してはどうかと提案して下さったし、駐日ロシア大使には、最後までエネルギーにモスクワからの日本語放送再開を訴え続けて下さった。

こうしたかけがえのない方々がいらしたおかげで、今回「MOCT (架け橋)」が他にもない今、深いメッセージ性をもって、この世に出たのだと、つくづく思う。すでに元NHKディレクターの馬場朝子さんからは、嬉しいメッセージを頂いた。「本読みました。いろいろとても懐かしく思い出しました。日向寺さんがやってきたことが歴史の中でしっかり評価され、記録されたことがとても嬉しいです。良かったです。いつロシアへ戻りますか?」

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大&早大非常勤講師)

